HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	知床ウトロ地区 ヘリテージトレイル Uコース（ウトロ崎～高台コース：U01～U10）：スポット解説文集
Citation	先住民族ヘリテージツーリズム ウトロモニターツアー 配布資料. 2011年9月20日（火）. 斜里町ウトロ, 北海道.
Issue Date	2011-09-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/47823
Type	lecture
Note	製作：北海道大学アイヌ・先住民研究センター「先住民族ヘリテージツーリズムWG」, 北海道大学観光学高等研究センター「次世代ヘリテージツーリズムWG」； 編集：山村高淑, 張慶在； ガイド音声：倉科悠那； 主催：北海道大学アイヌ・先住民研究センター「先住民族ヘリテージツーリズムWG」
File Information	UTORO+Heritage+Trail+U.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

知床ウトロ地区
ヘリテージトレイル

Uコース

（ウトロ崎～高台コース：U01～U10）

スポット解説文集

2011 年９月 20 日

【製作】　北海道大学アイヌ・先住民研究センター「先住民族ヘリテージツーリズムWG」
北海道大学観光学高等研究センター「次世代ヘリテージツーリズムWG」
【編集】　山村高淑（北海道大学観光学高等研究センター）
張慶在（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院）
【ガイド音声】　倉科悠那

U01　松浦武四郎記顕彰記念碑

ウトロ港を背に立つこの碑は、江戸時代の探検家、松浦武四郎（まつうらたけしろう）の没後 100 年を記念して、1988 年（昭和 63 年）9 月 30 日に建立[1]された「松浦武四郎顕彰記念碑」です。

武四郎は 1818 年（文政元年）に、現在の三重県松坂市に生まれました[2]。若いころから諸国をめぐり、1844 年、蝦夷地、つまり今の北海道探検に出発して後、数度にわたる蝦夷地の探検を行いました[3]。その行程は樺太、択捉島まで及んでいます[4]。ここウトロには、1858 年（安政 5 年）、知床岬からの帰路、番屋に一泊しています[5]。

こうした探検の記録は、蝦夷日誌・紀行として詳細に書き記されていて、江戸時代当時は、蝦夷地を知るための第一級の資料でした。武四郎はこれら日誌の中で、ただ単に、地名や地理、植生、魚類の分布について詳しく記述しているだけでなく、先住民族であるアイヌの人々が置かれた苦しい立場を明らかにし、その救済を訴えています[6]。彼が如何に現地のことを考えていたかを物語るエピソードです。

また武四郎は「北海道」の名付け親としても知られています。1869 年（明治 2 年）、明治政府は「蝦夷地」を「北海道」という名称に変更したのですが、この「北海道」という名称は武四郎の提案に基づくものでした[7]。

武四郎は 1888 年（明治 21 年）、71 歳の生涯を閉じます。その没後 100 年目の 1988 年、縁の地である、ここ斜里町ウトロに顕彰記念碑が立てられたのです。

碑には「知床日誌」から、次の歌が彫り込まれています。

「山にふし　海に浮寝の　うき旅も　馴れれば　馴れて　心やすけれ」

蝦夷地の旅を繰り返した武四郎の気持ちが伝わる歌ですね。

---

[1] 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 96。

[2] 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 7。

[3] 知床には 3 度訪れている。弘化 2 年（1845)、弘化 3 年（1846)、安政 5 年（1858)。秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 7 参照。

[4] 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 7。

[5] 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第 14 集〉』，p. 20、秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 50、松浦武四郎著、秋葉実翻訳・編(1858/2007)『松浦武四郎選集五　午手控（一）一～十一』北海道出版企画センター，pp. 284-294（p. 293 に「番屋庫等有。鱒番屋。止宿す。」とある)。

[6] 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 8。同書は『東西蝦夷山川地理取調日誌 85 巻』からの引用。

[7] 佐野芳和(2002)『松浦武四郎シサム・和人の変容』北海道出版企画センター，p. 45，92。なお武四郎は、道名撰定書の中で「北加伊道」と建白しているため、「厳密に言えば、国名・郡名の命名者である」とする文献もある。松浦武四郎研究会編(1990)『シンポジウム「松浦武四郎」北への視覚』㈲北海道出版企画センター，pp. 270-271。

U02　オプネ岩（三角岩）

今皆さんが立っているウトロ崎（うとろざき）の先端に、頂きのとがった岩が見えますね。現在「三角岩（さんかくいわ）」と呼ばれているこの岩は、アイヌ語では「オプネイワ」と呼ばれています。

「オプネイワ」とは「槍（やり）の形をした岩」の意味で、岩の形が三角形の「槍の形」に見えることから付けられた名前だと言われています[8]。

かつてアイヌの人たちは、漁に出る際、豊漁を祈って必ずこの岩にイナウ、すなわち木幣（もくへい）を立てて祈ったそうです[9]。

また、松浦武四郎（まつうらたけしろう）は、『知床日誌（しれとこにっし）』の中で、この辺りに「エペルケ」、頭が割れている岩、という地名を記しています[10]。あくまで推測ですが、このオプネイワの頂上、割れているように見える部分をかつてそう呼んでいたのかも知れません[11]。

---

[8] 斜里町立知床博物館協力会(2005)『知床半島西岸の地名と伝説 第9刷』p. 42、斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第14集〉』，p. 19。

[9] 斜里町立知床博物館協力会(2005)『知床半島西岸の地名と伝説 第9刷』p. 42、秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 96。

[10] 山田秀三（平成12)『北海道の地名―アイヌ語地名の研究別巻』草風館，p. 222。

[11] 松浦武四郎の『戊午日誌』の記述から、オプネイワの辺りを、「アハツテウシ」「アパッテウシ」と呼んでいたとの説もあり。尾﨑功（2006)『北海道海岸線地名めぐりの旅―新旧地形図が語る100選』北海道出版企画センター，p. 222参照。『戊午日誌』とは、松浦武四郎著『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌―上中下―安政6年著を指す。同書は、秋葉實解読、昭和60年、北海道出版企画センター刊として出版されている。秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 9-10によれば武四郎『手控』での記述とある。

U03　オロンコ岩

三角岩からウトロ市街へ向かう際、トンネルを抜けましたね。そのトンネルが通っているドーム状の大きな岩がオロンコ岩です。オロッコ岩とも呼ばれます。もし、あなたがお越しになった季節が 6 月下旬から 7 月頃でしたら、オロンコ岩の断崖には、様々な植物が一斉に美しい花を咲かせていることでしょう[12]。

実は先ほどみなさんがご覧になった三角岩とこのオロンコ岩は、実はもともとひとつの岩だったのですが、中心部が波と流氷（りゅうひょう）に削られ、現在のような形になったとされています[13]。

オロンコ岩頂上の平坦な面は標高 58m の高さにあります。実は、この標高、ホテルが立ち並ぶウトロ高台（うとろたかだい）の標高 60mや、チャシコツ崎（ちゃしこつさき）の標高 58m とほぼ同じ高さです。これは、こうした標高約 60m の土地が同じ時代に作られたことを意味しています。つまり、これら標高約 60m の面は、今から 12 万年前、波の浸食作用で作られた平坦な面、これを海食台（かいしょくだい）と言いますが、それがのちに隆起して出来上がった土地なのです[14]。

さて、このオロンコ岩、もともとは「サマッケワタラ」、アイヌ語で「横になっている岩」[15]や、「オロクシュマ」、同じくアイヌ語で「そこにすわっている岩」と呼ばれていたと言いますが、このうち「オロクシュマ」が転じてオロンコ岩という呼称になったと言われています[16][17]。

ところで、このオロンコ岩には、アイヌとオロッコ人が戦ったという、次のような言い伝えがあります。

昔、この岩の上にオロッコ人が住んでいて、アイヌに対して石や岩を投げたりものを盗んだりと悪さを働いていました。これに対し、アイヌは何度も攻めるのですが、岩の上からの攻撃に勝てません。そこである夜、アイヌは一計を案じ、海岸に海藻と砂を積み上げてクジラの形を造り、魚を並べておきました。翌朝、これに鳥が群がっているのを見たオロッコ人、寄りクジラ（よりくじら）、つまり海岸に乗り上げてしまったクジラだと思い込みます。そこでオロッコ人、アイヌが採る前にあのクジラを採ってしまえ、と岩の上から降りてきます。そこを待ち伏せしていたアイヌが一斉に攻め立て、オロッコ人を全滅させました。だからこの岩はいまでもオロンコ岩と言うそうな…という伝説です[18] [19]。

---

[12] 斜里町立知床博物館協力会(2005)『知床半島西岸の地名と伝説 第 9 刷』p. 42、斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第 14 集〉』, p. 13。
[13] 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第 14 集〉』, p. 37。
[14] 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第 14 集〉』, p. 6。
[15] 斜里町立知床博物館協力会(2005)『知床半島西岸の地名と伝説 第 9 刷』p. 42。
[16] 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第 14 集〉』, p. 19。
[17] 三角岩や神社山などこの辺りにあるいくつかの岩をあわせてウォロクシュマ（たくさん座っている岩）となったという説もあり。秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 96。
[18] 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第 14 集〉』, pp. 38-39。秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会, p. 96。
[19] なお、斜里町立知床博物館協力会(2005)『知床半島西岸の地名と伝説 第 9 刷』p. 43-44 には、昔チャシ

U04　オロンコ岩頂上の考古遺跡

オロッコ人とは、実際どの様な人々であったのか、今では知る術もありません。

しかし、この岩の頂上には、土を浅く掘り下げた炉（ろ）の跡が残されていることが発掘調査でわかっています。炉の跡の他に、土器や石器は発掘されなかったので、正確な年代を判定することは困難なのですが、炉の跡は異なった時代の地層からも出ているため、ここを誰かが継続的に使用していたことは明らかです[20]。

一体どのような人たちがこのオロンコ岩を使っていたのか、想像しながらオロンコ岩の頂上から知床の風景を見渡すのも良いかも知れません。

コツ岬にアイヌがいて、オロンコ岩のオロッコ人と諍いがあり、両者最後の激戦地トンチカマナイである、という説が載っている。

[20] 斜里町史編纂委員会編(1955)『斜里町史』, p.33。

U05　ゴジラ岩

皆さんの目の前に、ローソクのような形でそびえている岩は、現在、ローソク岩、あるいはゴジラ岩と呼ばれていますが、もともとはこの辺りはアイヌ語で「ウトルチクシ」と呼ばれていました。「ウトルチクシ」とは、＜ウトル＞＝その間を、チ＜我らが＞、クシ＜通行する所＞という意味だと言われています[21]。集落から浜へ、集落から集落へ往来する際、このあたりの岩と岩の間の細い道を通っていたことからこの名前が付いたと言われています[22]。江戸時代の探検家・松浦武四郎は、知床日誌の中で、「突兀（とっこつ）とした岩の間を、舟が漸く（ようやく）越えると云う義である」と記しています[23]。

このウトルチクシが、このあたり一帯の呼称、「ウトロ」の語源であるとされています。

---

[21] 松浦武四郎は、知床日誌の中で、「ウトルチクシ。名義、岩間を船が越る義か」と記している。山田秀三(2000)『北海道の地名～アイヌ語地名の研究別巻』草風館，p. 222。

[22] 松浦武四郎は、手控（てびかえ）、今でいうフィールドノートに次のように記している。「島岩二ツ三ツ有、其間を通り行が故にウトロチクシと号るとかや」。松浦武四郎著、秋葉実翻訳・編(1858/2007)『松浦武四郎選集五　午手控（一）一～十一』北海道出版企画センター，pp. 294-295。その他、山田秀三(2000)『北海道の地名～アイヌ語地名の研究別巻』草風館，p. 222、斜里町立知床博物館協力会(2005)『知床半島西岸の地名と伝説 第 9 刷』p. 43、斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第 14 集〉』，p. 19 などを参照。

[23] 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 50 による現代語訳。

U06　神社山の古代墓地遺跡

ウトロ市街地中心部に位置するこの岩山は、南側斜面に祠（ほこら）が位置することから「神社山」と呼ばれています。

ウトロに漁場（ぎょば）が設置されたころに、豊漁と海上安全を祈願して弁才天（弁天）を祭る社（やしろ）がここに置かれたと言われています[24]。もとは、江戸時代後期、このあたりの漁業を統括していた場所請負人（ばしょうけおいにん）・藤野家（ふじのけ）の番屋に付属する社（やしろ）であったとされています[25]。

ところで、現状から推定することは大変難しいのですが、かつてこの岩山の北側斜面、ゴジラ岩側には、洞窟が存在しました。洞窟自体は、市街化が進む中で削られてしまい、現在は洞窟の原型をとどめていません。

かつての洞窟の奥にあたる部分は、現在では落石の危険性からフェンスで覆われていますが、手前の道路からその様子を確認することができます。この洞窟奥では、約 2,000 年前の続縄文文化（ぞくじょうもんぶんか）から 10 世紀頃のオホーツク文化に至る複数の墓（はか）が見つかっています。このような、洞窟内に遺された墓地の遺跡は、あまり知られておらず、大変貴重なものです。周辺で発見されている古代の集落遺跡との関係を含めた研究が待たれるところです[26]。

---

[24] 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 97。
[25] 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，p. 97。
[26] 斜里町ウトロ遺跡神社山地点については、斜里町立知床博物館編（2009)『しれとこライブラリー9　知床の考古』北海道新聞社，pp. 175-182，p. 193 などに詳しい。

U07　ペレケ川

知床連山からオホーツク海へ、南から北へと流れ、ウトロ崎（うとろざき）の西側の根本に注いでいる[27]この川は、ペレケ川と呼ばれています。

このペレケ川が海にそそぐ箇所は、沖から見ると、陸地が大きく裂けているように見えることから、アイヌ語で「ペレケイ」(perke・i、割れている、破れている、裂けている・ところ）と名付けられたという説があります[28]。

また、松浦武四郎は 1858 年（安政 5 年）に著した（あらわした）『戊午志礼登古日誌（ぼご・しれとこにっし)』の中で、「ヘケレ」という地名を記していますが、これもペレケ川を指したものではないかと言われています。

「ヘケレ」について同日誌には、現代語訳すると次のように記されています。「一説には、この辺一帯は大きな丸い石からなる浜なのに、この川の両側だけが白砂（しらすな）がある。それが美しいのでヘケレという。ヘケレは『明るい』という意味である」[29]。

アイヌ語地名研究者の山田秀三（やまだひでぞう）氏によれば、「割れている」という意味の「ペレケ」と、「明るい」という意味の「ペケレ」とが似ているので、人によって地名の解釈の仕方が異なる例が道内各地で見られると言います。ひょっとしたら、これまで記されてきたペレケ川の地名の由来に関する記録にも、こうした混乱があったのかも知れません。

では、ここから 100 メートルほど上流、斜里（しゃり）バス・ウトロターミナルの横にあるペレケ川河岸公園に行って、川のそばまで下りてみましょう。

---

[27] この表現は、尾﨑功（2006)『北海道海岸線地名めぐりの旅』北海道出版企画センター，p. 222 を参考にした。

[28] 斜里町史編纂委員会編（1955)『斜里町史』, p. 867 に依る。山田秀三(2000)『北海道の地名～アイヌ語地名の研究別巻』草風館, p. 223、斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第 14 集〉』, p. 19、斜里町立知床博物館協力会(2005)『知床半島西岸の地名と伝説 第 9 刷』p. 44 なども参照。

[29] 秋葉實(1994)『松浦武四郎知床紀行集』斜里町立知床博物館協力会，pp. 50-51。斜里町立知床博物館協力会(2005)『知床半島西岸の地名と伝説 第 9 刷』p. 44 にも「昔は、ヘケ゚ル＜heker＞〔明るい所〕とも言ったらしい」との記載あり。

U08　ペレケ川河岸公園

さて、ここから上流に向かって、ペレケ川河岸公園（ぺれけがわ・かがんこうえん）が整備されています。上流へ向かって遊歩道が整備されていますので、野鳥の声を聞いたり、植物を見たり、サケ・マスの遡上（そじょう）を観察したりしながら、散策を楽しむことができます。今日はそうした見どころの中から、3 種類の動植物を紹介しましょう。

まず、オオウバユリです。

散策路の両側には様々な植物を見ることができますが、もし 7 月頃でしたら、是非オオウバユリの花を探してみてください。高さ 1.5 から 2 メートルくらいに伸びた 1 本のしっかりした茎に、10 個から 20 個の黄緑色の花をいっせいに咲かせます。

このオオウバユリは、アイヌ語でトゥレプ（turep）と呼ばれ、アイヌの人たちが重要な食料として用いてきた植物です。地下にある鱗茎（りんけい）が食料となる部分で、掘り出してきれいに洗い、臼（うす）でついて、水にさらしてデンプンを取ります。また残った繊維質の多いところは団子にして冬の保存食として利用されていました[30]。

次はサケ・マスの遡上です。

このペレケ川では、8 月になるとカラフトマスが遡上（そじょう）を始め、それに少々遅れてサケも遡上を始めます[31]。その後、11 月頃までサケ・マスの遡上する姿が見られます。

そして最後にカワガラスです。

ペレケ川沿いを歩いていると、「ビッ、ビッ」という高い声[32]が聞こるかもしれません。そんな時は、川の方を注意して見てみてください。運が良ければ、全身が濃い茶色の羽毛におおわれた全長 22～23（にじゅうにさん）センチの野鳥、カワガラスが川に飛び込む姿を見ることができるかも知れません。

他にもペレケ川沿いには多くの動植物が生息しています。是非、五感を使ってゆっくりと歩いてみて下さいね。

それでは、ここから上流に向かって遊歩道を進んで行きましょう。200 メートルほど進むと、右手に小さな登り道が見えてきます。そこからペレケチャシのある高台に登ることができます。

登り切ったところには、熊よけの電気柵がありますので、柵の部分に触れないように気をつけて、扉を開けて舗装された道に出てください。道に出たら、扉をしっかり締めるのを忘れないでくださいね。

---

[30] 斜里町立知床博物館協力会(1987)『アイヌ文化・草と樹木（郷土学習シリーズ第 9 集)』, p. 16。
[31] 斜里町立知床博物館協力会(1996)『オホーツク・知床のさかな(郷土学習シリーズ第 18 集)』, pp. 18-20。
[32] 斜里町立知床博物館協力会(1981)『知床の野鳥観察（郷土学習シリーズ第 3 集)』, p. 38。

U09　ペレケチャシ

ペレケチャシはウトロ市街地を流れるペレケ川の左岸（さがん）にあります。川に突き出した形をしていて、3 方を急峻な崖（きゅうしゅんながけ）で囲まれ、深さが 1m ほどある 2 条（にじょう）の堀[33]で仕切られています。

チャシとは、アイヌ語で「砦（とりで）、柵囲い（さくがこい）」[34]などという意味で、戦闘の際の砦や避難場所、物資の保管場所として利用されたらしく、多くの場合、溝や堀で周囲と区切られています。

毎年のサケ・マスの遡上時期には、このペレケチャシの上からも、オホーツク海からペレケ川に戻り、懸命に上流へとさかのぼるサケ・マスの姿を見ることができます。

[33] 宇田川ほか編（1985）『北海道のチャシ集成図Ⅰ（道東北篇）』，p. 43。
[34] 知里真志保（1984）『地名アイヌ語小辞典』，p. 15。

U10　開拓農地の文化的景観

皆さんの目の前に広がる広大な農地は、もともと、うっそうと茂る原始林でした。

それが、1910 年(明治 43 年)ごろ、このあたりの土地 500 ヘクタールが農牧用地として国有未開地に編入され、「チャシコツ原野植民地」として一般に開放されたことから農地開拓が始まります。

記録によれば、最初に 1912 年(大正元年)、福島県からの団体が入植し、続いて 1913 年(大正 2 年)に宮城・群馬の各団体が入植するなど、その後、毎年入植が続き、1918 年(大正 7 年)ごろには、20 戸あまりの集落を形成したといいます[35]。

現在は、種子用馬鈴薯（しゅしようばれいしょ)、ビート、にんじん、秋蒔き小麦（あきまきこむぎ)、春蒔き小麦（はるまきこむぎ)、種麦（たねむぎ）がつくられています[36]。

オロンコ岩のところでも説明しましたが、このあたりはおよそ 12 万年前に、海底火山層を波が削ってできた海食台（かいしょくだい）が、のちに隆起して出来上がった土地です[37]。開拓には相当な苦労があったそうですが、こうした古い時代の海底火山層は、礫（れき）の大きさが比較的小さく、土壌化も進んでいるため、畑として利用することができたようです[38]。

---

[35] 斜里町立知床博物館協力会（1992)『郷土学習シリーズ第 14 集　ウトロの自然と歴史』, p. 26。
[36] 斜里町立知床博物館協力会（1992)『郷土学習シリーズ第 14 集　ウトロの自然と歴史』, p. 28。
[37] 斜里町立知床博物館協会(1992)『ウトロの自然と歴史〈郷土学習シリーズ第 14 集〉』, p. 6。
[38] 斜里町立知床博物館協力会（1992)『郷土学習シリーズ第 14 集　ウトロの自然と歴史』, p. 27。